

慢性期における頭部外傷後の成長ホルモン分泌不全

小瀧 勝¹, 佐伯 直勝², 内野 福生¹, 岡 信男¹

¹千葉療護センター脳神経外科, ²千葉大学医学部脳神経外科

【目的】頭部外傷によって発生する下垂体分泌低下症は決して希ではないと言われている。しかし、頭部外傷後の成長ホルモン分泌不全症（GHD）の発生率は明らかではない。今回、受傷から数年以上経過した慢性期における重症頭部外傷患者のGHDの臨床経過、発生頻度について検討した。

【対象・方法】交通事故により頭部外傷を受け、当センターに入院した慢性期の重度後遺症患者92例を対象とした。男性67例、女性25例、年齢は18-89歳（平均41.5歳）、受傷からの期間は0.8-30.6年（平均8.5年）であった。入院後に下垂体機能の評価として、下垂体ホルモンの基礎値、IGF-1の測定を行った。

【結果】重度後遺症患者92例のうち10例において、IGF-1の値が年齢、性別を加味した基準値の-1.5SD以下の値を示した。男性8例、女性2例で、年齢は23-52歳（平均36歳）、受傷からの期間は2-21年（平均13.4年）であった。10例のIGF-1値は57.8-125ng/ml（平均93.9ng/ml）であった。成長ホルモン分泌不全症10例にGHRH-2の負荷試験を行ったところ、3例においてGHの頂値がさらに基準値（9ng/ml）以下の反応を示した。

【まとめ】慢性期の重症頭部外傷患者92例のうち、IGF-1値が-1.5SD以下は10例（11%）にみられ、GHRH-2の負荷試験で、その内の3例（3.3%）でGH分泌低下がみられた。多くのGHDの報告が、受傷後1年以内の発生頻度であるが、我々の結果は受傷後平均8.5年経過しており、従来の発生頻度に比べて非常に低いものであった。

今後は症例の蓄積、急性期からの経時的な観察、年齢 など多方面からの検討を要すると思われる。